

中国社会文化学会・例会のお知らせ
(2018年度・第3回)

日時：2018年12月22日（土）午後3時から6時

場所：東京大学駒場キャンパス18号館1階メディアラボ2

報告者及論題：

胡明輝（カリフォルニア大学サンタクルーズ校歴史学部准教授、東京大学客員准教授）
「古典の知は有用か？——18世紀中国における太湖流域河道のマッピングについて」

司会：伊東貴之（国際日本文化研究センター教授）

言語：中国語（通訳あり）

共催：科研費基盤研究（B）「グローバル化する中国の現代思想と伝統に関する研究」

報告概要

大学の財政に関する最近の世界的な傾向が示しているように、今日、古典の知は無用だと考えられている。アラビア語、サンスクリット語、ラテン語、古典中国語で書かれた古代のテキストは、最も深遠な政治の言語が書きこまれた神聖なメッセージの集積であるとあたりまえのように思われてきた。それらの言語を解き明かす能力は選ばれた少数者だけに許された特権であり、そのような能力は往々にして、専門化されたプラグマティックな知の複合的な体系にからめ取られてきた。近世中国に関しても、わたしたちはそのようなものとして古典的な知の現実と機能を理解する必要がある。

環境史、思想史、政治史の研究者たちは、これまでも地方の河道と帝国の政策について詳細な研究を行ってきた。しかし、太湖地域を進化する河道の体系であるとみなしてきたものは少ない。この報告では、古典学者と水力技術者が太湖地域の河道をどのように分析し、マッピングしてきたかを、1799年から1814年までの長江下流域において、浙江巡撫を務め、時の漕運総督でもあった阮元（1764-1849）に導かれながら論じてみたい。そのころまでに、古典学は繁栄を誇り、歴史地理学が確固たる研究分野として登場し、帝国の地理学者たちは清帝国の地理全図を作成していた。こうした古典的かつ実践的な知の蓄積は、どのように省や地方における河道管理に基礎を提供したのだろうか。省や地方の情勢に対する士大夫の関心は、どのように古典や歴史の知に関して行われていた議論に影響を与えたのだろうか。そして結局のところ、古典的な知は近世中国において有用だったのだろうか。